

## 地域日本語教室を 「共生」実現への希望の空間へ

にほんご あいあい代表 福村 真紀子

### 子育て中の移住女性は、 親子参加型日本語教室を求めている！

1990年代中頃に「公園デビュー」という言葉が流行しました。親が幼少の子どもを連れて近所の公園に出掛け、そこに集まっているほかの親子らと関係をつくり、仲間入りを果たすことを意味します。また、現在、幼稚園や公園などで子どもを通じて知り合った母親同士の関係を表す「ママ友」という言葉もよく耳にします。これらの言葉が表すことは、子育ての仲間の重要性です。しかし、裏を返せば、子育ての仲間づくりが果たせない親たちの閉塞感や焦燥感も浮かび上がります。日本で生活する日本人の親でさえ、子育て中にこのような心の問題を抱えているならば、日本へ移住してきた外国人の親はどうでしょうか。その人たちの中には、母国を離れることによる血縁、地縁からの断絶に加え、日本語でコミュニケーションができないために地域に溶け込めず、閉塞感や焦燥感を募らせ、その解決策も見いだせない人もいることでしょう。

子育て中の移住女性には特に、地域の人と知り合える場が必要です。現在、各地で展開されている地域日本語教室も、彼女たちが地域の人と知り合える水際とも言えます。しかし、多くの地域日本語教室では、マンツーマン、あるいは小グループで教科書を使って日本人が日本語を教えるという、学校や塾のようなスタイルを取っているようです。体系的な日本語の学習が無意味だというわけではありませんが、教える側と教わる側が固定化された教室のスタイルでは、移住女性が幼少の子どもを連れて参加することも、人間関係をつくることも難しいと思われれます。そこで、子育て中の移住女性には、親子参加

型日本語教室という選択肢が必要です。ここで言う親子参加型日本語教室は、教科書を使ってマンツーマンや小グループで日本語を学ぶのではなく、親子一緒に活動する教室のことです。

### 参加者同士の交流を重視する 「にほんご あいあい」

しかし、親子参加型日本語教室の数は十分とは言えません。そこで、私は2010年2月に東京都日野市で、親子日本語サークル「にほんご あいあい」(以下、「あいあい」)を立ち上げました。私は、「あいあい」の運営者であり、実際の活動時にはファシリテーターをしています。

#### 「にほんご あいあい」について



設立年月: 2010年2月  
対象者: 主に親子。母語・国籍不問  
場所: 日野市立地域子ども家庭支援センター  
活動日時: 不定期(月1~2回、1回1.5時間)  
活動内容:  
・ テーマを巡る対話  
・ 自国紹介  
・ 室内ゲーム  
・ レシピ紹介  
・ 料理大会・パーティ  
・ 小物作り  
・ 絵本の読み聞かせ、手遊び歌  
・ 年2回市民レベルのイベント

※参加人数は都度違う(10名~30名)



#### 「にほんご あいあい」について

「あいあい」は、さまざまな国の親子と一緒に活動する教室です。日本人も「日本語を教えるボランティア」という立場ではなく、外国人と同じ目線の参加者です。主な参加者は母と子ですが、参加者に条件はなく、父親、仕事をリタイアした地域の人たち、学生、これから親になる人たちなど多様です。(「あいあい」の概要は、上記参照)

「あいあい」の活動目的は、参加者同士の交流です。地域で孤立することのないように、人間関係づくりのきっかけが得られることをめざしています。そのため、主な活動内容は対話です。例えば、「今までで一番うれしかったこと」や「最近子育てで悩んでいること」など、そのときの参加者間で共有しやすいテーマで語り合います。親たちが対話をしている間、子どもたちは同じ室内でおもちゃで遊んだり、親の膝の上に座ってお菓子を食べたりしています。ほかにも、得意料理のレシピや自分の国の紹介をしたり、小物作りをしたり、子ども向けに手遊び歌や絵本の読み聞かせをしたりします。

## 人間関係づくりと言葉の学びを通じた、「共生」の実現をめざして

私が考える地域日本語教育のコンセプトは、「言葉の教育」というよりは、「言葉の活動」です。言葉による交流活動の中で、日本語非母語話者は緩やかに言葉を学んでいくと考えています。また同時に、母語話者が非母語話者とのコミュニケーションのあり方に気づいていくことも期待できます。

例えば日本人の夫と就学前の息子と共に移住したAさんは、来日当初、日本語でのコミュニケーションができず、対話の輪に入れませんでした。今でも日本語を自由自在に操れるわけではありませんが、来日してから現在までの約2年間、「あいあい」の活動にはほとんど参加しています。今では、活動の中心となり、私に代わってファシリテーションをすることもあります。なぜAさんの参加の仕方は変容したのでしょうか。

「あいあい」では、日本語に限らず、その人が表現できる言語を受け入れるようにしています。その言語を理解できる人がほかにいれば、その人に通訳をお願いします。通訳できる人がいなければ、ジェスチャーや絵で意思疎通をすることもあります。とにかく、参加者が選び、参加者ができる表現方法を受け入れるようにしているのです。また、言語だけではなく、身体の動きやメディアなど、その人自身を表現できる方法も受け入れます。

例えば、Aさんは母国の伝統的なダンスを踊ることが好きなので、ある活動日に、ほかの参加者の前で踊ってもらいました。私は何も段取りをしなかつ

たのに、Aさんは事前にiPadに民族音楽をダウンロードし、民族衣装を持ってきてトイレで着替え、みんなの前でダンスを披露してくれました。また、iPadを使って、母国



ダンスの披露など、主体的な関わりが生まれています

で挙げた自分の結婚式のときの写真を見せて母国の文化について、英語に少しの日本語を交えながら説明してくれました。ダンス、音楽、衣装、写真は言語ではありませんが、Aさんがどのような人なのかを表す方法です。ほかの参加者は、Aさんの姿を見、Aさんの声を聴き、Aさんに対して拍手をしたり質問をしたりしました。

Aさんは参加者からの反応に手ごたえを感じ、「あいあい」でこれまでに3回ダンスを披露しています。こうして、「あいあい」になじみ、今では「あいあい」のほかのメンバーの家に行き一緒に洋裁をするなど、近所づきあいも始まりました。また、Aさんの母語に興味のある人たちを募って、Aさんが母語を教える分科会も開催しました。このような、自分を生かせる活動を通じて、人間関係づくりをすることで、参加者は緩やかに言葉を学んでいくのだと思います。

子育て中の移住女性に限らず、地域の住民同士が言葉を使って交流できる場は、人間関係づくりの場と言え、地域住民同士が「共生」の実現へ近づける、希望の空間と言えるのではないのでしょうか。



子ども家庭支援センターとの共催イベント